

## 刊行にあたって

ある静かな朝に一通のメールが届いた。

「先生、治療に近道はありませんでした」

3ヵ月前に「また連絡します」とキャンセルの連絡があった50歳の女性患者からである。彼女は咬み合わせが合わない、顎が痛い、手がしびれるなど多種にわたる全身症状を主訴に、1年半前に来院した。10年前に上顎にブリッジを装着したことにより咬合違和感が生じ、多くの歯科医院を転々とした。そして次々と歯が割れて抜歯となった結果、上顎は総義歯、下顎は局部床義歯となっていた。1年半治療を行ったが、症状は改善せず来院が途絶えた。その後、他の歯科医院へ行ったが、やはり思うような結果が出なかったのであろう。このような患者をすっきりと治すことは難しい。

本書は、2019年に上梓した拙著『ある日突然やってくる困った患者さん「あなたなら、どう診る？」』の続編としてまとめられた。前著は、歯科医師だけでなく、スタッフが夢中で読んでいるという話をたくさんいただいた。おそらくは歯科医師よりも、スタッフのほうが身近でいろいろな被害に遭っているのであろう。しかし、ここに出てくるさまざまな「困った患者さん」は、当然、読者の皆様に実際に被害を及ぼすわけではない。「人ごと」として読み進めることができる。

この「人ごと」というのが大事なポイントである。

実際にこのような患者に出会ったときに必要なのは、いかに状況を第三者として俯瞰してみられるかである（心理学ではメタ認知という）。また、人は他人が行っていることを見ているとき、脳の中では行っている人と同じ脳の部分が活性化している（ミラーニューロンという）。

つまり、本書を読み進め、さまざまな「困った患者さん」の実態を知ること、脳レベルですでに「困った患者さん」と出会ったときの準備が行われているのである。

落とし穴に落ちない方法は、落とし穴の存在を知ることである。

本書が、読者諸兄が落とし穴に落ちないための道しるべとなれば幸いである。

2024年3月

島田 淳